

新収蔵資料紹介

2024.2
▼
2024.12

水害に苦しむ村々が要望

150年以上前の治水事業計画

「筑後川水吐新川見積絵図」
本資料は、江戸時代に上弓削村

(現・北野町上弓削)の庄屋を勤めた緒方家に伝来したもので、筑後川の治水を目的とする新川開削計画をまとめた絵図1舗(縦155・2cm、



筑後川水吐新川見積絵図(西を上にして撮影)。青は河川、黄色は道、緑は堤防の草木などを示す。筑後川は、画面右下の東から西へ流れ、久留米城付近で南に向きを変える

横206・8cm)です。

筑後川中・下流域の安居野村(現・山川安居野)から若津(現・大川市向島)辺りまでの範囲を描き、本流から水を流す新川の計画地を朱線で示しています。最も長い新川は、御井郡和泉本村下(現・東合川町)から三瀬郡草場村(現・三瀬町)まで約6・8kmに及びます。

図の周りには、新川の意義や、工事に必要な人数・賃金・資材等の見積を記し、また新川沿いに櫛木を育て、実の代銀を新川の修繕費に当てるという維持管理策も盛り込んでいます。

内容から作成時期は江戸時代後期とみられ、水害に苦しむ村々が久留米藩に治水事業の実施を要望するた

め、具体的な計画案として作成したものと考えられます。

田主丸町の神職の文書や記録 神社や家族の姿を伝える

「安元家資料」

安元家は、中世以来、若宮八幡神社(現うきは市吉井町)に神職として務めたと伝われます。江戸時代後期に田主丸町へ移り、祇園社(素盞鳴神社)や天満宮に奉仕しました。

令和5年7月、九州北部豪雨による家屋浸水の被害を受け、その復旧に際し本資料群が発見され、田主丸町に關係する内容であることから、本市へ寄贈されました。神社の由緒や祭神などを記した「神社明細帳」や氏子総代会議事録、能の謡本など、総数207点を数えます。

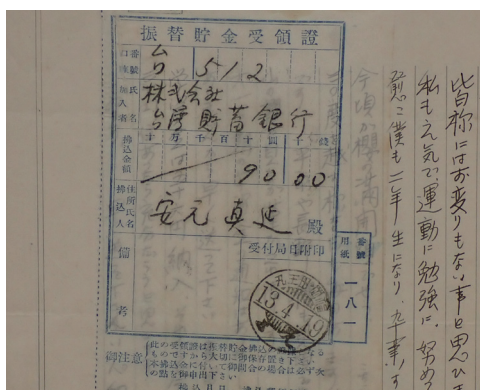


左上から時計回りに会議録、神社明細帳、書簡綴り、御神期大祭記、鞍馬天狗、素盞鳴神社御昇格雑書綴

その一部である「素盞鳴神社御昇格雑書綴」には「素盞鳴神社寶物摸写」が綴られ、同町在住の彫刻師伊東儀左衛門祐良・甚五郎祐勝制作の舞楽面が、鮮明に描かれています。

また寄贈者の祖父一真氏が、台湾の師範学校時代に父親へ宛てた書簡も含まれており、入学から教員免許の取得、赴任校の決定、兵営地での出来事などを記しています。

左の写真は、師範学校在学中に、授業料と小遣いの送金を父親に依頼する手紙であり、送金後の領収証が貼付されています。一真氏の86円の要望に対して90円が送金されており、今も昔も変わらない親心が伝わります。



昭和13年から2年分の書簡が綴られている